慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	キェルケゴールの思惟方法 : 主体性及びイロニーの概念の哲学方法論的意味
Sub Title	Thought-method of S. Kierkegeaard : Methodological sense of conceptions of "Subjectivity" and "Irony"
Author	大谷, 愛人(Otani, Hidehito)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1953
Jtitle	哲學 No.29 (1953. 3) ,p.67- 98
JaLC DOI	
Abstract	"Philosophy" is "to do philosophy." The first and fundamental problem of philosophy is philosophy in itself; and it is a constant relation in which it relates to itself, as G. Simmel said. And in this point consists the "Wesenseigentumlichkeit" which distinguishes itself fundamentally from other sciences. It is too famous that Kant has said about the essence of "Philosophy" like this; Man can not study "Philosophy", except "to do philosophy". According to the above-mentioned view-point, only those who carried on their shoulders all their lives the task of studying real philosophy, in other words only those who continued ernestly "to do philosophy" throughout lives, are the true Philosophers. And I saw such a philosophical existence in Soren Kierkegaard, first of all. Of course, I can recognize F. Nietzsche as a representative philosopher of such kind, as Jaspers indicated. But it is S. Kierkegaard who makes me (my existence) selfconscious of its own theme, and also presented me the way of looking into its problem; namely it is S. Kierkegaard who teaches me the true philosophy. In this reason I selected S. Kierkegaar rather than Nietzsche as a theme of my study. What is the characteristic of S. Kierkegaard's philosophy? It is that he took out "thought" from the deepest bottom of human existence, made it the object of doubt, asked for its possibility fundamentally, and by having spiritual attitude of continuing "to do Philosophy" all his life, he presented a new attitude, namely "eine neue denkende Gesamthaltung des Menschen (Jaspers)", mediating infinite reflexion, being self-conscious of the fact that he can not obtain any ground for his reflextion, witout bringing any theory, fundamental stand-point or one world-image. In case of Kierkegaard, "to do philosophy" was presentation of "die denkende Gesamthaltung des Menschen". What this essay is seeking for, is Kierkegaard's thought-attitude, which was presented in the precedent paragraphy. More concretely speaking, object of this research is to clarify not only outer form, but also inner structure of his thought-method.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000029-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キェルケゴールの思惟方法

——主体性及びイロニーの概念の哲学方法論的意味——

大谷愛人

序

主概念と同一の名辞を以てそれを説明する定義は所謂循環定義として論理学が固く戒めるところのものであるが、而もこの論理学の鉄則を踏破して独りその存在を保つのが哲学なのである。蓋し「哲学」とは「哲学すること」であり、哲学にとつての第一問題は実に哲学それ自体であり、哲学がそれ自らに関係するところのその不断の関係だからである。(1) そしてこの点に哲学がそれ自らを他の諸科学と根本的に区別するところの本質特徴が存するのである。カントが哲学の本質性格に就て次の如く言つて居ることは余りにも有名である。「人間は『哲学』を学ぶことは出来ないで、『哲学すること』のみを学ぶことが出来る。(2)」

そこで「哲学」をでなく、「哲学すること」を、実際に生涯担ひつゞけた者こそ、換言するならば斯様な「哲学する

こと」を情熱的に生涯続けた者こそ、正に真実の哲学者であると言ふことが出来よう。そして斯様な哲学的実存を私は誰よりも先づキエルゴールの中に見出すのである。ヤスペルスは斯かる哲学者としてキエルケゴールのみならずニーチェをも同時に挙げて居るが、[3] 両者はその様に類似してゐるとは考へられない。確にヤスペルスも言ふ通り、両者の思惟、思惟様式は非常に類似性があるが、両者の実存構造は全く相異せるものであり、それ故前述の類似性も実存との相互関聯に於て見るとき、全く相異せるものであることが理解されるのである。そして私自らの実存にその課題を自覚せしめ、而もその解決方法を例示して呉れるのはキエルゴールであり、即ち「哲学すること」を私に教へてくる者はこのキエルケゴールなのである。

却説、キエルケゴールの特徴は何であつたか。それは、彼が思惟を実存の奥底からとり出して懐疑の対象となし、その可能性を徹底的に問ひ、「哲学すること」の情熱を生涯持ち続けるといふ精神的態度を有つことによつて、幾可の教説や一つの根本的立場や一つの世界像を決して齎すことなく、寧ろ反省として如何なる地盤をも獲得することが出来ないと云ふことを自覚してゐる無限の反省を媒介として、人間の新しい全体的思惟の態度を呈示したといふことである。[4] 即ちキエルゴールに於ては「哲学すること」とは「全人的思惟の態度の呈示」であつたのである。

本小論文の問題としてゐるところのものは斯様な意味に於て呈示されたところのキエルケゴールの「思惟態度」なのである。即ち彼の思惟方法の単なる外部的形式若しくは様式のみならず内部構造も亦そうなのである。

(註)(1) Georg Simmel : Hauptprobleme der Philosophie. Sechste Auflage. 1928 (Sammlung Göschen) の第一章は斯かる見解を美しき筆法をもつて表現している。

(2) これはカントが彼の哲学講義のとき繰返し繰返し学生に云ひふくめた言葉であり、この言葉程カントの哲学の根本思想を端的に充分に示してゐる言葉はない。それのみならずこの言葉は「哲学」の根本的意味として解し得る。

(3) Karl Jaspers : Vernunft und Existenz. 1935. S. 6. ヤスペルスはキェルケゴールとニーチエを思惟方法論的意味に於て全く同一的に扱つて居るが斯かる見解は両者の個別的実存を無視した形式主義的把握のきらひが多分にある。

(4) Karl Jaspers : Ibid. S. 6.

一

哲学的思惟方法には二つの種類がある。その一つは所謂単に考へられた思惟方法であり、他は根源的なそれ自ら考へられてゐるところの思惟方法、即ち、現に行はれてゐるところの思惟を自覚して行くといふ思惟方法である。[1] 即ち前者は客観的に形成せられた思惟方法としての体系的な哲学的方法論に於て意味されるところのものであり、後者は方法論的自覚の有無にかゝはらず遂行する思惟の根本原理の自覚をなしてゐるところのものである。

哲学的思惟方法には前述の二種があると云ふもそれは何も両者が各々孤立的に存し得るといふ意味ではなく、一つの哲学的思惟そのものゝ両側面であり、これを哲学史に即して見るときに個々の哲学者の強調点、課題といふ点から見て前述の二系統に分けられるといふ意味である。

斯くの如くに思惟方法を分けて見るとキエルケゴールの哲学史的位置が明瞭になつて来る。即ち前者を志向し、その探究を自己の課題として来た者はキエルゴールによつて所謂体系家 Systematiker と呼ばれる哲学者群であり、後者を自覚し、その探究を自己の課題として来たのがキエルケゴールなのである。要するに前者は思惟の形式であり、後者は思惟の内容、実体である。キエルケゴールの特色は思惟の形式と内容とを如実に分離せしめ内容の見体的姿を画き出した処にある。というのはキエルケゴールがそれがために生命を賭けて戦つた前者の代表的なヘーゲルの

哲学は思惟の形式のみを大きく画き出し、而もその形式だけをもつて内容と実体の位置に自らを置いて独裁君主的存在を示してゐるが、キエルケゴールはこの状態を根源的な悲劇として感得したからである。[2] そこでキエルケーゴルは普遍的な、客観的な思惟形式をでなく、彼の思惟が依て以て立つてゐるところのその根本原理を自覚し具体的に把握せんとしたのである。

然し乍ら斯かる根本原理なるものを彼は直接的には得られなかつた。[3] 彼はそれを得るために根源的なイロニーに遭遇したのである。[4] そのイロニーとは、哲学者達が求めんとしてゐる思惟方法の実体は、彼等が求め得た当の思惟方法（これは形式だから）とは全く異れるものであるといふこと、それのみならず、求めんとすればする程、近付かんとすればする程、益々遠くはなれてしまふものであるといふこと、なのである。そこでキエルケゴールの課題となつたところのものは、このイロニーの中に秘められたものを求め且つ示すことであつたのである。このイロニーとの対決に於て、こゝからて始めて前述の根本原理が得られるわけである。

然しながら根本原理が直接的には得られなかつた由故は単にこのイロニーが介入してしまつたからではない。このイロニー自体の性格の中に存するのである。即ちこのイロニーは決して客体的な、眼前存在的な性格のもの、客体的観照に耐え得るものではなく、それは主体の思惟それ自体の存在構造、作用構造の中にまつはるところのものであり、即ち思惟自体の内在的性格なのである。従つてこのイロニーは客体的に、直接的に説明記述され得るものではなく、主体的に内面的に思惟が自らの中に沈潜してこれと真実に対決するとき、その自覚的対決を通してはじめて関接的にその秘密が露呈されるのである。キエルケゴールの思惟方法が間接的方法と称せられるのはこの意味からである。[5]

然らばキエルケゴールがその間接的方法をもつて示さんとした思惟方法の根本原理、実体を我々は如何にして知る

ことが出来るであらうか。それはその間接的方法の性格の如く彼の具体的思惟過程を通してゞある。即ち彼自身をしてそれを語らしめ、我々は唯その妥当性を自覚検証すればよいのである。[6] 換言するならば、彼がその根本原理を自覚的に把握せんとし、その結果獲得し得た自ら基本概念として規定して居るところのその概念を、その自覚に即しつゝ分析し、そこにその概念の本質を見出し、而もなほ斯くなしつつ自覚の根源にまで遡つて行くのである。

(註)(1) Christoph Schrempf : Gesammelte Werke. Band. 10. Auseinandersetsungen. 4. Süren Kierkegaard. Erster Teil. (1935). S. 47.

(2) Georg Siebers : Die Krisis der Existentialismus. (1949) S 21—23.

(3) Süren Kierkegaard : Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift zu den philosophischen Brocken. (1846). (Übersetzt von H. Gottsched und chr. Schrempf) に於てキェルケゴールは自ら体系を最も否定しつゝも、而も事実は体系的と言へてもよい位ひに自らの思惟方法論を論述してゐる。その核心は真理は直接的方法によつては示されないこと、即ち主体的真理は直接的方法を以つては示されない、といふことである。キェルケゴールの哲学位置を彼自ら示した書として本書が最も著しいものである。

(4) この事実の最もよき表れは彼の学位論文 Der Begriff der Ironi" の出でたことによつて明らかである。

(5) Bernhard Meerpohl : Die Verzweiflung als metaphysisches Phänomen in der Philosophie Süren Kierkegaards. (1934) S. 1—11. 然しメールポールはこの関接的方法を実存辯証法と同意に用ひ、ソクラテスの方法と対比させて説明してゐる。

(6) Systematiker を最も嫌ひ従つて自らも斯かる方法で把へられ、それによつて所謂弟子、学派たるものの出来ることを最も恐れ嫌つたそのキェルケゴールの思想を把へるには、斯かる方法を取らざるを得ず、又これが最も妥当的であると思ふ。

二

我々の研究対象はキエルケゴールが彼の思惟の根本原理を自覚的に把握せんとして、その結果獲得し得たところの、そして自ら基本概念として規定してゐるところのその概念であつた。そして研究方法はその概念をその自覚に即しつゝ分析し本質を見出しつゝ、尙進んで自覚の根源にまで遡つて行くことであつた。

しからばその概念とは何であるか。それは「主体性」である。そこでこの主体性の概念を分析し、その根源へと遡つて行くことにする。[1] 斯くすることによつて関接的方法を以て示されたキエルケゴールの思惟方法が認知されるであらう。

1. 主体性は全人的課題である。

キエルケゴールにとつて人間に課せられた最高の課題は、人間が「主体的となる」Subjektivwerden ことである。これは彼が Abschliessende unwissenschaftliche Nachschsift zu den philosophischen Brocken に於て主体的問題を解明するにあたつて根本前提として規定したところのものである。キエルケゴールは言ふ、「客体的には人々は絶えず事象のことのみを語り、主体的には主体及び主体性のことを語る。――しかも今や問題は正に主体性である。[2]」即ちキエルケゴールにとつては「主体的になることが主体の問題であつて[3]」而もそのことは「主体性そのものに関する[4]」ことなのである。

然らば何故主体的となることが人に課せられた課題となるのであらうか。キエルケゴールはこれを示すべく「死」と云ふ例を引ひてゐる。キエルケゴールは「死」は了解されたこととは考へないと言つてゐる。即ち「解つたつもりで居て解らないもの[5]」これが「死」である。これは時間的に何時訪れるか解らない。即ち「定めなきもの[6]」Ungewissheit である。この「定めなさ」に対して人間は率直に態度をとらなければならない。然しながら現実には決してそうは行

かない。彼は言ふ「説教家は死の定めなさを考へてゐるつもりで、しかも彼が定めなしと言つてゐるものゝ中へ定めなさを入れて考へることを忘れる。といふのは彼が興奮して感動的に死の定めなさを語つてゐる中に遂には無条件に一生の計画をする様に聴衆を鼓舞する。即ち死の定めなさを全く忘れてしまつてゐるのである。」[7]と。そこでキエルケゴールの言ふその率直な態度とはどういふことなのであらうか。彼は言ふ「死が常に定めなきものであり、私が死すべきものであるとして、私が一般的なる人間であるのでない限り、この定めなさも一般的に了解することは出来ない。然るに私は確に一般的な人間ではない。」[8] 斯様に一般的でない個体としての人間にとつては斯かる「死」といふ定めなさを一般的に、客体的に了解することは不可能であるといふ規定が生れて来る。そこでキエルケゴールが言ふに斯かる定めなさ、即ち個々に特有なものとしての主体的問題は、主体的に克服しなければならぬと云ふことになるのである。「私が主体的となる程度に応じて、その定めなさが、私の人格性に益々弁証法的に差迫つて来る」[9]と言つてゐる。

こゝで注意しなければならぬことは、主体的となると云ふことは思惟に於て問題を解決することではない、といふことである。人が死一般を考へそれの解決法を考へ出したとしてもそれはその人間の全人的行為としての意味をもつものではなく、「唯にかういつたこと一般」[10]に過ぎない。然し主体が自己の死を考へることは、個々の主体にとつてかういつたこと一般ではなくて行為である。「正に人間が自己の実存についての省察に於て行為により自己自身を完成すること、従つて自己の考へてゐることを考へつゝ実現することの中に主体性の発展が存する。」[11] 斯くして「死」といふ主体的問題はその主体の全生涯に関係せしめられるのであり、従つてこの側からしても主体性は何よりも先づ第一に全人的状況であるといふことが理解されるのである。

そして事実、キエルケーゴル自身自己の全生涯を通じて主体的にならんとし、主体的に生きんとしたのである。それを最も明瞭に示してゐるのは一八三五年の夏に自己の使命を反省しつゝ書いた日記である。(12)

「私が真に必要としてゐることとは、自分は何を為すべきかといふことを自分の力で明らかにするにある。何を認識すべきかと云ふことは私にとつては問題ではない。勿論一切の行動には一つの認識が先行せねばならぬと云ふことはこの場合論外である。寧ろ肝要なことは自分の規定を理解することである。言ひ換へるならば、抑々神は何を私から要求するかということを知るにある。私にとつての真理を発見すること、そのために自分が生き且つ死なんとする理念を発見すること、これが肝要である。所謂客観的真理なるものが私自身及び私の生にとつて何等深い意義を持たなかつたとすれば、それを探し求めたことは何の役に立つたことであらう。……私の必要としたところのものは認識の生活のかはりに全人としての生活であつた。……そして私はそれに向つて精進しよう。」

(註)(1) Liselotte Richter : Der Begriff der Subjektivität bei Sören Kierkegaard. Ein Beitrag zur christliche Existenzdarstellung. (1934). S. 1—9. 本書は表題の示す如くキェルケゴールの主体性の概念を直接研究対象としてゐるのであるが、方法論は本小論の意図とは異れるものであり、尚又主体性の概念を哲学的方法論的性格のものとして見て居ない故に、意に満たないものがある。

(2) S. Kierkegaard : Abschliessende unwissenschaftlihe Nachschrift zu den philosophischen Brocken. S. 198.

(3) S. K : Ibid. S. 198.

(4) S. K : Ibid. S. 198.

(5) S. K : Ibid. S. 228.

(6) S. K : Ibid. S. 228.

(7) S. K : Ibid. S. 229.

(8) S. K : Ibid. S. 229.

(9) S. K : Ibid. S. 229. 斯かる表現はキェルケゴール独特である。常に自己の問題性を客観的概念の世界に見ず、自己の存在に直接的に差迫つたものとして、然しそれも単に畏怖的、気分的意味でなく、弁証法的意味構造をもつて居なると云ふところに、又斯く解するところに特殊性があるのである。

(10) S. K : Ibid. S. 229—230.

(11) S. K : Ibid. S. 251. 本箇所も最もキェルケゴールらしさを表はしてゐる。シュレンプがどの程度それをはつきりと表現してゐるかは、デンマーク語原典と比較して見なければわからないが、幾分なりともその消息を伺ひ知るためにシュレンプ訳をそのまゝ引用して見よう。——gerade darin liegt ja die Entwicklung der Subjektivität, dass der Mensch in seinem Nachdenken über seine eigene Existenz sich selbst handelnd durcharbeitet, dass er also denkend vollzieht Was er denkt,z.B. nicht bloss einen Augenblick denkt : "jetzt musst du jeden Augenblick aufpassen", sondern jeden Augenblick aufpasst."

(12) H. Höffding : Sören Kierkegaard als Philosoph. (1919) S. 50—51. より引用す。

三

2. 主体性は自己自身への関心である。(1)

主体性の概念を最も顕著に示し、且つそれによつてキェルケゴールの主体性哲学を一般的理論的哲学から明白に区別する言葉として次の言葉が屢々挙げられる。——「精神とは人間が彼の生を認識するところのその能力である。(2)」Geist ist, welche Macht die Erkenntnis eines Menschen über sein Leben hat.「人間とは精神である。精神とは何であるか。精神とは自己である。自己とは何であるか。自己とは自己自身に関係するところの関係である。即ち関係といふことの中には関係が自己自身に関係するといふことが含まれてゐる。それ故自己とは単なる関係ではなくて、関係が自己自身に関係すると云ふ関係である。(3)」前者は日記中の言葉であり、後者は "Krankheit zum Tode"

の言葉である。この二つの命題を考察するにキエルケゴールは「人間」を「精神」として規定して居り、「精神」を「自己」として規定して居り、この精神としての「自己」を、自己自身に関係するところの関係として、即ち「関係」として規定して居るのである。即ち斯かる表現はこれを前者の命題との関聯に於て考へて見るに、それは認識者が自己自身の、「認識する」と云ふ「生」を認識するといふ事態を示してゐるのである。[4] この事態はキエルケゴールが主体性と云ふ概念に於て獲得し、画き出し、意味したところの最も本質的なものである。

キエルケゴールの「関係」なる概念はこの様な事態を内含してゐるわけであるが、尙進んでこの事態をもつと具象的に表示するなら、それは次の三つの様態をその内部構造として有つて居ることが理解される。(1) 自己を問ふと云ふ存在様態 Selbst-in-Frage-gestelltsein. (2) 自己所有（意識所有）Selbst-haben, Bewusstsein haben (3) 関係が自己自身に関係するその関係。Verhältnis, dass das Verhältnis sich zU sich selbst verhält. 以上の三つの様態であるがその各々に少し説明を加へよう。

(1) 自己を問ふと云ふ存在様態。Selbst-in-Frage-gestelltsein.[5] 人間は有意的にも無意的にも、又意識的にも無意識的にも自己存在に関はるのである。即ち人間は人間であることによつて自らに関係するのである。却説、斯かる敍述は一般論に過ぎない。キエルケゴールの主体性の概念は斯かる一般論を意味して居るのではなく、又斯かる一般論を以てしてはそれを規定することは出来ない。キエルケゴールにとつての問題は、こゝに於ては不問に附されてゐるところの、それ故にこの敍述が一般論となりはてゝしまつたその原因をなしてゐるところの、「自己」の具体的内容、及びそれから必然するところの関はり方、即ち関係の具体的構造なのである。この問題性にこそキエルケゴールの特殊性が存するのである。

その特殊性を明瞭に示すために他の学者の主体性哲学との比較をして見よう。キエルケゴールは哲学史上この主体性の概念の必然的たる現象形態として次の二つを挙げてゐる。[6] その第一は主体性が世界史に於て極めてその権利を主張するに至つたその現象形態でありこれはソクラテスの立場だと言ふ。第二は主体性の性格として、それは過去への逆戻りはなく、反対に古きものは消え失せて凡てのものが新しくなつたのでそこから新しき現象形態が出現すべきとするならば、主体性がより高度の形式に於て主張せられること以外のものではない故に、主体性の二乗、反省の反省に相応するところの主体性の主体性である。そしてこれはフイヒテの立場だと言ふ。

先づソクラテスの立場であるが、これはキエルケゴールが最も影響を受けた立場である。哲学の心理的起源が「驚異」であることは周知の通りである。自然・世界・人生等あらゆる客観的現象に対する驚異と共に哲学が始つた。然しこの哲学の登場と共にそれに全く暗々裡に前提されたところのものは主観と客観の対立関係である。主観は客観に向ふものとして置かれた。主観の道は客観の内奥へと云ふ宿命的矢印しのもとに客観の奥深く入つて行つたのである。主観にとつて客観が一切となつた。即ち主観は自ら客観となりはて、客観の中に完全に見失はれてしまつたのである。こゝにソクラテスが登場する。ソクラテスに於ては思惟はその対象を自己から離れた客観の世界に求めてゐるのではなく、自己の存在それ自体に関はつてゐること、即ち思惟の対象が問題でなく、思惟する主体それ自らが問題である。キエルケゴールはソクラテスの立場を斯く解してゐる。[7]

次にフイヒテの立場であるが、フイヒテはカントによつて独断論を解消せんとしてたてられた批判主義の子である。然らばフイヒテの出現した当時の精神的状況はどうであつたらうか。キエルケゴールはそれを次の如く言つてゐる。「批判主義に於て自我が自我の内観に沈潜すればする程、この自我は益々憔悴してゆき、遂に曙の神アウローラー

の夫の如く不死なる幽霊となつた。この自我は恰も狐に讃められて有頂天になり骨を失つたあの鴉に似てゐる。反省が絶えず反省を反省することによつて、思惟は邪路に踏み込んでしまつてゐて、前へ進む毎にその一歩一歩は自然に益々思惟をあらゆる内容から遠ざけて行つた。あらゆる時代に於て見られることであるが、こゝには、思弁しようとする限り正しい立場をもつことの特に必要であることが示されてゐる。思惟は自己の探してゐるものがその探求そのものゝうちにあり、そこを探さない限り永久に見出され得ないといふことにまるで気付かなかつたのである。この哲学は、眼鏡をかけて居ながらその眼鏡を探す人と同じであつた。即ち自分の鼻の前にあるものを探しながら、それを鼻の上に探さず、だから決してそれは見付からない[8]」と。即ち批判主義に於て思惟は自己を完全に整理し、消化しきつたつもりで居た。然し客観の世界に Ding an sich なるものが残されたまゝであつた。批判主義は斯かる遺産を残したのである。こゝにその子はそれを当然うけつがなければならぬ。フイヒテはその物自体こそ自我なのではあるまいかといふ問ひを発し、その解答に務めたのである。「フイヒテはそれを思惟の中に移し入れることによつて、この『自体』の困難を取り除いた。彼は自我を自我＝自我に於て無限化した。生産的自我は所産的自我と同一である。Ⅲ＝Ⅲは抽象的同一である[9]。」フイヒテの立場は確に批判主義の成果の上に、立つてその後に残つた問題を扱ふ立場であつてこの意味に於ては確にソクラテスやこの批判主義の立場よりも尚一歩進んだ立場と言へよう。然しながらキエルケゴールも言ふ如くこの立場は「二乗された主体的意識の立場」に過ぎない。即ち結局のところフイヒテの出発点としての自我も思惟する主体、意識主体としての意味しか有たぬ自我であつてこの点に於てはソクラテスの立場と大差ないのである。

以上キエルケゴールの主体性哲学の立場の特殊性を示すためその比較として二人の主体性哲学者の立場を簡単に述

べたわけであるが、この辺で問題をもとにもどし、キエルケゴールの立場を述べて見よう。

兎に角キエルケゴールの立場は前二者と非常に異るものをもつてゐる。即ちキエルケゴールは前述の如き抽象的な自我とか意識とか云ふものからは出発せずに、換言するならば、単なる主体からは出発せずに、実存から、即ち具体的な実存する人間から出発するのである。キエルケゴールに於ては人間自体が、実存する人間、実存する自己が根本問題であつた。前二者の哲学は主体理解と言つても思惟主体の理解であるに過ぎぬが、キエルケゴールの主体理解は実存理解 Existenzverständnis である。[10] この実存する人間（自己）自体を明るみに出すことがキエルケゴールの努力の対象であつたところから見てメールポールはキエルケゴールの哲学を広義の「人間学」として規定してゐる。[11]

こゝに於てキエルケゴールが露呈せんとした「自己を問ふといふ存在様態」の意味が明瞭に理解される。それは、ソクラテスやフイヒテが思惟主体としての自我に関はり、思惟主体としての自我を問ふたのとは全く異り、人間は人間であることによつて、実存する人間が「実存する」と云ふことに於てその自己の「実存」に関はるのであり、即ち「実存」する「自己」を問ふのであり、実存するものとしての自己は斯かる「実存関係」に於て在るといふことが自己を問ふといふ存在様態として示されるのである。

(2) 自己所有（意識所有） Selbst-haben, Bewusstsein-haben.[12] 以上の事態からして我々はキエルケゴールがその「関係」に於て意味した事柄は何よりも先づ第一に「意識を有つ」と云ふこと、（実存する）自己自身の意識を有つといふこと、であることが理解される。こゝに於て直接性と反省（或は意識性）の区別、直接的行動と反省的行動（意識的行動）との区別が明瞭になる。即ち人間は意識をもつて行動する限りに於てのみ精神 Geist を有つのであり、真の人間であるといふことが理解される。それ故「精神とは自己である」といふ命題は、人間存在の本質は「意識を

有つ」といふことの中に、即ち「自己自身意識してゐる」といふことの中に存する、といふことが意味されるのである。自我は高度の意味に於て人間であればある程、自我は自己を有ち、自分の自己を有つ。即ち "Je mehr Bewusstsein, desto mehr Selbst."[13]

(3)関係が自己自身に関係するといふ関係。Verhältnis, dass das Verhältnis sich zu sich selbst verhält. そこで人間存在の本質が意識を有つといふ事態の中に存するといふ前述の規定を、別の規定、即ち「人間は Geist によつて抱かれた肉体と霊魂との綜合である」[14]といふ規定と関聯させて考へて見るならば、人間は彼が意識の中に斯様な綜合を包括する時にのみ自己であると云へよう。即ち人間は、彼が肉体と霊魂との綜合として常に自己自身と対立関係に入つてゐる時にのみ、換言するならば Geist によつて抱かれた斯様な全体的なものとしての肉体と霊魂との関係が自己自身に関係する時にのみはじめて人間であり得るのである。[15] この故にそれは全く Geist の中に於てのみ、意識の中に於てのみ可能である。そこで自己は「自己自身に関係するところの、有限と無限との意識的綜合である。[16]」それは尚一層次の語で明白であらう。「自己とは何であるか。自己とは自己自身に関係するところの関係である。……(自己は)単なる関係ではなくて、自己自身に関係するところの関係である。[17]」

却説、関係の内部構造が前述の如くに露呈されたが尚一つの点をキエルゴールは示してゐる。それは「関係」概念が「運動概念」であるといふことである。フッセルによつて現象学が唱へられて以来「事象そのものへ」Zu dem Sachen selbst! といふ言葉が頻りに言はれたが、キエルケゴールの哲学にこの言葉を類推して見るならばそれは「自己自身へ」といふ言葉になる。[18] そこでこの「自己自身」に関係するところの関係としての自己は既述の如く実存する人間、実存意識に於てある人間、以外のものではあり得ない。従つてキエルケゴールは斯かる「実存する」を内

実として有つたその「関係」概念を運動として規定したのである。実存意識する精神は実存意識するものとしてそれ自身「運動」Bewegung[19] に於てある。従つて主体が主体的となるためには、自己が真の自己であるがためには、意識しつゝ自己の主体性に沈潜することが必要となる。主体性が自己自身への関心であるといふのは斯様な意味と内部構造をなしてゐるのである。

(註)(1) Interesse, Sorge. であり哲学的断片後書より引用。

(2) S. Kierkegaard : Tagebuch 中の語、但し引用は L. Richter : Der Begiff der Subjektivität bei S. Kierkegaard. (1934). S. 1 から。

(3) S. Kierkegaard : Krankheit zum Tode. (Schrempf) S. 10.

(4) L. Richter : Ibid. S. 1.

(5) Adolf Sannwald : Der Begriff der Dialektik und die Anthropologie. Ein Untersuchung über des Ich-Verständnis in der Philosophie des deutschen Idealismus und seiner Antipoden. (1931). S. 246.

(6) S. Kierkegaard : Der Begriff der Ironie.「イロニーの概念」(キェルケゴール選集第三巻、三木、桝田氏訳) 一〇頁

(7) ソクラテスに関してはキェルケゴールは彼の学説よりも存在そのものに、歴史の中に於ける彼の存在そのものにイロニーと主体性を見出してゐる。しかしこのことはソクラテスの意識にはのぼつて来てゐなかつたところの事柄である。

(8)「イロニーの概念」四八頁

(9) 右書四八九頁、尚フイヒテに於ては「自我」は事実であるよりも事行 Tathandlung であり「自我はすべてのものを生産し、自我は他我を合一し、その他我は絶対我から産出し 主観も客観も超越的な意識、即ち純純粋自我の定立である」と言つて居る。(J. G. Fichte : Das System der Sittenlehre. S. 9.)

(10) Existenzverständnis は M. Heidegger の語であるが、キェルケゴール主体性哲学の基本概念はこれである。この意味に於て、A. Sannwald はキェルケゴールの主体性哲学も単に Ich-Verständnis なる概念によつて規定してしまつて居るがこれは Ich の意味規定も不明な故妥当ではない。

(11) Bernhard Meerpohl : Die Verzweiflung als metaphysisches Phänomen in der Philosophie Sören Kierkegaards.

(1934). S. 14.

(12) Ibid. S. 48.

(13) S. Kierkegaard : Krankheit zum Tode. (Schrempf). S. 26.

(14) Ibid. S. 22.

(15) B. Meerspohl : Ibid. S. 48.

(16) S. Kierkegaard : Krankheit zum Tode. S. 26.

(17) Ibid. S. 10.

(18) この両語ともそれを通して「具体性の論理」を示してゐるのであつて、斯かる論理学の見地からするならば両者は等しいと言へるであらう。E. Manheim : Zur Logik des Konkreten Begriffs. (1930) はこの問題に解答する。

(19) これは後に「生成」といふ概念にかはる。

四

3. 主体性は自己と成らんとすること（生成）である。第三に考へられることはキエルケゴールは主体性を生成として規定してゐることである。[1] 前述の如くキエルケゴールに於ては「運動」なる概念は基本的意味をもつのであつて、即ちその運動は不断の運動を意味するのであり、従つて自己自身に関はること、関心することは一回的な事柄ではなく、「主体が自己自身に無限に関心をもつこと」[2]なのである。然しこの「主体」は勿論実存する主体実存する自己であることから見れば、既述の如く主体が主体的となるために意識しつゝ自己の主体性に沈潜するといふことが、即ち実存意識する精神は実存意識するものとしてそれ自身「運動」「生成」に於て在るといふことは充分理解されるのである。

此処に於て「生成」なる概念の意味が明瞭化して来たように思はれる。即ちヘーゲルに於て所謂「生成」「辯証法的運動」の問題性は、経験的自我が如何にして純粋思惟の主体となるかといふことの中に存するのであり、即ち媒介過程が問はれたのであるが、これに反してキエルケゴールに於ては、実存的思想家がその中にあつて彼の可能性を現実の生成の中に渡し入れるところの「意識的に実存する」といふことへ如何にして入つて行くかといふ問題である。[3] この意味に於てヘルマン・デイーム[4]が斯かるキエルケゴールの「生成」なる概念を「自我が自己自身を意識的に実存することに於て選び出すところの選択の行為」[5]として、即ち「選択の行為」として規定して居ることは興味深い。

言語的表現はいづれにせよ「生成」はキエルケゴールに於ては、自然的自己から本来的自己へと至る激情的、全人的運動なのであり即ち本来的自己回復運動である。この意味に於てキエルケゴールに於て主体性とは、現存在から存在への、実存から本質への、具体性（現実性）から可能性への、実存的関係概念 existentieller Relationsbegriff として規定する学者もある。[6] 従つて「生成」は人間存在の、実存の根本内容なのである。

この故に実存的思想家、主体的思想家は、主体的と成ることを一生の課題とする故に成果を問題とせず生成に自己の一切をかけてゐる。これが主体的思想家の実存である。即ち主体的思想家は実存する者として実存しつゝ存在する故に生成に於てあると云ふことは言ふまでもない事である。「主体的思想家は実存するものとして絶えず努力してゐるがこれは有限的意味で彼が努力の目標を有して居り、それを達成すれば完成してしまふといふ様なことを意味してゐるのではない。彼は無限に努力し、絶えず生成に於てあるのである。」[7] それ故この無限的生成は先きに述べた意識的実存に於ての自己自身の選び出しの無限的努力であり、キエルケゴールの語をもつてするならば瞬間々々に迫り来る「あれか——これか」Entweder-Oder の選択的課題を前にしての決断 Entscheidung を内容とするのである。[8] 生

成とは斯かる意味での決断の無限的連続として規定し得るのである。

(註)(1) S. Kierkegaard : Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift zu den Philosophischen Brocken. (1846). (übersetzt von H. Gottsched und Chr. Schrempf). S. 198.

(2) Ibid. S. 199.

(3) Hermann Diem : Die Existenzdialektik von Sören Kierkegaard. (1950). S. 22.

(4) ヘルマン・デイームは現存のキェルケゴール学者でキェルケゴールの哲学をその方法論的立場から研究してゐる学者であり、最近のキェルケゴール学者として最も特色のある、研究に新分野を切開いた学者である。デイームのキェルケゴール解釈は最も堅実な妥当なものと言へよう。

(5) Hermann Diem : Ibid. S. 23.

(6) Theodor Haecker : Der Begriff der Wahrheit bei Sören Kierkegaard. (1932). S. 45. テオドール・ヘツケルはキェルケゴールは人間の存在を運動、生成として規定したとなし、従つてこの運動、生成に人間が主体的に徹するときそこに真理が把握されるとなして居る。ヘツケルはキェルケゴールに於ける真理と逆説との関係を巧みに取挙げてゐる。

(7) S. Kierkegaard : Ibid. S. 172.

(8) Ibid. S. 198.

五

4. 主体性は実存理解[1]である。この命題はキエルケゴールの根本命題であつて、前述して来た諸命題からも帰結されるであらう。然し今こゝに於てこの命題の真意を更めて考察して見よう。

キエルケゴールは言ふ「客体的思惟は思惟する主体とそれの現実存在、即ち Existenz に関して無関心であるが、主体的思想家は実存するものとして自己の思惟に本質的に関心をもつ。彼は思惟の中に実存してゐるのである。[2]」

と。これによつて理解される如く、先きに主体的思惟の構造として自己自身に関心すること、関係することと規定したが、[3] これは実存する人間の内部構造である故に、人間は斯かる思惟に於て実存するといふ意味になる。然し思惟は最早客体的意味に於ける「思惟」ではなくなり、その実存する人間の思惟となる。即ち此処に於て「思惟する」と「実存する」とは表裏的関係になる。ヘルマン・デイームの表現をもつてするならば、"Mit dem Bewusstwerden findet sich das Ich vor in dem Kreislauf, in dem Denken und Existieren, Erkennen und Wollen zusammenfallen im Denken des Existierenden." である。[4] 従つて「自己の思惟に本質的に関心をもつ」[5] といふ事態が実存する人間の「思惟する」になるのであり、而してこれは「実存する」といふ事態と同一である。それ故この事態を不断の生成に於て眺めるならば以上の命題は実存する自己に対しては次の如く妥当するであらう。実存的思惟とは「実存する自己がその実存的思惟に本質的に関心をもつ」と云ふ事になる。

この意味に於て既述の「関心」といふ概念が実存の内部構造として実存理解 Existenzverständnis を意味してゐることが解る。「実存するものにとつては実存といふことが最高の関心である。そして実存に関心をもつことが現実である。[6]」キエルケゴールは「イロニーの概念に於て批判主義哲学に対して批判をし、警告を与へることによつて消極的ながら、閃かに彼自身の哲学方法論的意図をしめして居たが、その意図は次の彼の言葉によつて明白に示されてゐるのである。「凡ての本質的な認識は実存に関係するものである。換言するならば、本質的に実存に関係する認識のみが本質的認識である。然し本質的認識が本質的に実存に関係することは、前述の如き抽象によつて達成せられる存在と思惟との同一性を意味するのではない。又認識がその対象として定在の中に在るものに関係することを客体的に意味するのでもない。これは寧ろ認識が本質的に実存者である認識者に関係すること、従つてすべての本質的認識は

実存及び実存することに本質的に関係することを意味する。[7]」と。

却説、斯かるキエルケゴールの思想からするとき、キエルケゴールの思惟方法を単に抽象的思惟方法に対する具体的思惟方法とし、解釈してゐる多くの後世のキエルケゴール学者は根本的誤謬をおかしてゐることが理解される。アイゼンフツトも言ふ如く、[8]抽象的思推の反対が具体的思惟ではない。何となれば両者とも対象に対する思惟の形式的関係方式を示すのであり、従つて両者の差は観念的なものゝ具体化に於ける徐々の差異に過ぎない。然しながらキエルケゴールの思惟はその様なものではなくして、「全体的人間の実存領域への精通存在 Vertrautsein から由来するところの思惟」即ち実存それ自らに関はるところの思惟なのである。この故にキエルケゴールの「思惟」とは「真に実存することであり、従つて自己の実存を意識をもつて貫徹することであり、所謂ば遥かに実存を超越しつゝ同時に実存の中に生成する[9]」ことである。換言するならば実存に最高の、而も無限の関心をもつことである。

斯くの如く運動・生成が無限的に遂行される故にこゝからして実存は無限の可能性に於て在るのであり、そしてこの可能性を一歩一歩克服して行くことがその課題であることが理解される。然らばキエルケゴールは可能性の一歩的克服として何を得たか。それは次の言葉の中に要約されてゐる。「自己自身に関係するところの関係、即ち自己は、自分で措定したものであるか、それとも他者によつて措定されたものであるかのいづれかでなければならない。自己自身に関係するところの関係が他者によつて措定されたものである場合には、それは自己自身への関係であるとともに、更にまたその全関係を措定したところの第三者に対する関係でもある。斯かる派生的な、措定された関係が即ち人間の自己である。――それは自己自身に関係するとともに、かゝる自己自身への関係に於て同様に他者に対して関係するところの関係である。[10]」と。斯かる命題からしてキエルケゴールに於ては人間の自律性といふことは全く問題

たり得ないことが解る。キエルケゴーに於ては人間を措定したこの第三者を神として認め、実存の根底に措いてゐるのである。[11] 即ちキエルケゴールの実存する人間とは、自己の根拠に神を認め、その神と自己との関係を意識し、その意識の中に於て実存する人間のことなのである。換言するならば「人間は神によつて創造されたものである」[11]といふ命題がキエルケゴールの実存概念の根底である。

そこで「人間は神との本質的関係に於て在る」といふ命題がそこから生起する。然しながらキエルケゴールは斯かる関係を単に有神論的意味に解したのではなく、神との関係は人間の具体的生の中へと突き出て居るものとして、意味してゐるのである。[13] 此処に於て実存に最高の関心をよせることが実存であるといふことの意味が最も具体的に示されるのである。――それは自己自身に関心をもつ単なる自己意識ではなく、又自己存在の根底たる神に関心をよせるグノーシス的な客体的な神への知識でもなく、「自己とその根底たる神との関係」への関心、意識である。この故に実存理解は、即ち実存的思惟は宗教的思惟に導くものであり、これに於て完ふされるのである。キエルケゴールは言ふ。「実存及び実存することに本質的に関係することが本質的認識であり、従つて倫理的認識及び宗教的認識が本質的認識である」[14]と。

(註)(1) Existenzverständnis といふ語はキェルケゴールの使つた語ではなく、ハイデツガーがはじめて使つた語であるが、実存の概念、意味を示すに最も適切な語である。

(2) S. Kierkegaard : Abschliesseende unwissenschaftliche Nachschrift zu den Philosophischen Brocken. S. 155.

(3) 前項参照。

(4) Hermann Diem : Die Existenzdialektik von Sören Kierkegaard. (1950). S. 23.

(5) S. Kierkegaard : Ibid. S. 155.

(6) Ibid. II. S. 13.

(7) Ibid. S. 254.
(8) Heinz Erich Eisenhuth : Der Begriff des Irrationalen des philosophisches Problem. Ein Beitrag zur existenzialen Religionsbegründung. (1931).S. 221. S. Klerkegaard : Ibid. II. S. 39.
(9) Ibid. II. S. 7.
(10) S. Kierkegaard : Krankheit zum Tode. S. 10.
(11) Bernhard Meerpohl : Die Verzweiflung als metaphysisches Phänomen in der Philosophie Süren Kierkegaards. (1934)S. 52.
(12) Ibid S. 52.
(13) Ibid. S. 52.
(14) S. Kierkegaard : Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift zu den Philosophischen Brocken. S. 254.

六

次に前述の主体性の本質規定を前提として主体性の哲学方法論的意味を考察しよう。キエルケーゴルはこれを示すべく主体的思惟と真理との関係を詳細に論じてゐる故に、本小論もそのキエルケゴールの論述を取挙げて考へて見ることにする。

(1) 真理の主体性に就て。真理は思惟と存在との一致である。我々は真理を存在との思惟の一致として経験的に規定しようと、或は又思惟との存在の一致として観念的に規定しようと、「存在」といふ名のもとに意味され理解されるところのものに充分な注意を向けなければならない。[1] 然し乍らその「存在」といふ概念のもとに於ては、単独的具体的自我としての立場から普遍妥当的抽象的観念性を思惟し且つ斯かる思惟に於て同時に実存するところの実存的思想家の現存在より以外の何ものも意味されないことは今までの考察からして明らかである。従つてキエルケゴールの課

題もこゝからして明らかになつて来る。それは真理を思索することではなく、真理の中に在らんとすることなのである。[2] 真理は決して固定的な存在関係に就ての客観的敍述ではなく、その中にあつて存在関係が具現されるところの実存形式なのである。それ故真理は、認識がその対象としての現存在の中の或るものへと自ら関はるといふことの客観的な言述ではなく、認識が本質的に実存者であるところの認識者に関はることであり、即ち又すべての本質的認識が実存及び実存することに本質的に関係することなのである。[3] それ故真理の中に存在することは、決して完結しないところの過程の中に存在することなのである。人間は努力家であり続ける。そして思惟と存在との全き一致は、人間の憧憬としてのみ実存者に対して存するのである。[3] 斯様な憧憬・切望は、実存者の主体性のすべての要素が最も高度化されるところの激情の瞬間にその厳密なる表現を見出すのである。それは人間にとつて到達され得る最も高度なる真理の表現であり、又斯くしてキエルケゴールは彼の有名な、非常に論争的に形成されたテーゼ「主体性が真理である」[5]へと到達するのである。然しながらこのテーゼは亦「真理は主体性である」[6]と解釈され得るのである。

このテーゼの意味するものは「真理」概念の運動性であつて、従つてキエルケゴールに於ては実存としての真理への主体的な不断の努力こそ「真理—内—存在」の意味するところのものなのである。然しながらキエルケゴールは斯様な真理への主体的な不断の努力を弁証法的構造をもつものとして規定してゐる。キエルケゴール自身の弁証法はソクラテスの弁証法的応用といふ様な意味をもつものであり、[7] それはソクラテスに於て志向され意味されながらも、表現さるべくして表現されなかつたものの所謂ば貫徹なのである。それは単線的なヘーゲル弁証法に対立する複線的弁証法である。[8] といふのは設問者の、一方に於ては対象（話題）に対する、他方に於ては談話者に対するこの二重関係は二重の弁証法的運動へと到るからである。キエルケゴールに於ては斯かる弁証法の対象は彼自身の自我であつてそ

れは自己の実存に於て自己活動へと自由になるのである。このことは対話者自身の内部に於て進行するところの、そして又対話者はそれの中に於て彼自身の実存を得んとするところの弁証法的運動なのである。他方の運動といふのは二人の対話者が成果を問題とすることによつてあらゆる臆測上の、誤り多き既成的知識から互いに逃れ合ふその二人の間に行はれるのである。(9)

然しながらたとへキエルケゴールが対話形式に於ては記述はしないといへども彼が匿名をして語らしめて来たところのすべての事柄は、斯の複線的なソクラテス的弁証法の内部に於ける運動である。確にキエルケゴールは特別には対話形式を用ひはしなかつたが、その匿名による全体の著作から見るときその事自体が一つの大きな対話なのである。この場合勿論読者が直接の対話者である。(10) 然しながらキエルケゴールはこの読者に対しては、彼等に固定的な、一定の見方といふものを証明するところの教師として対応するのではなく、彼は匿名といふ形態をもつて、読者自身が直接的にはそれに対して態度をとることの出来ないところの「見方」を実験的弁証法に於て示すのである。(11) 何となれば常に「見方」の態度といふものは、一つの形といふものを他の見方の態度によつてイロニツシュに取消されて行き、読者はキエルケゴールが彼等に対してそれの代理をするところの一つの「成果」(12)へとは何処に於ても接近し得ないからである。キエルケゴールは、彼が「ある何物か」を教授してゐるといふ様な多くの誤解を取り去るために自己自身に就て次の如く言つてゐる。"Ich betrachte mich selbst am liebsten als Leser, nicht als Verfasser der Schriften."(13) と。そして又この故に「主体性が真理である」といふこと「真理は主体性である」といふこと、は真理に対する固定的な、一定の、即ち客体的な立場といふものが存し得ないといふ事が理解される。キエルケゴールは言ふ「……もしも誰かゞ親切にも私が一定の立場を有つてゐると信ぢるならば、そして彼が其の親切を極端にまで発揮し、それ

が私の立場であるからと言つて此の立場を採用するといふ様なことがあるとするならば、彼の親切はそれが全くそれに価しない者に向けられてゐるといふことによつて私を悲しませ、彼の立場はそれが私の立場と同一であるといふことによつて私を苦しめる。私の生命ならば賭けることが出来る。私の生命をかけてならば私は真剣勝負をすることが出来る。これこそ「五〇ドラクマに価する大講義」(『クラテユロス』84 b) は愚か、一ドラクマにも価ひしないきれはししか提供し得ない私が貢献することの出来る唯一つのことである。」[14]と。キエルケゴールによるならば、彼の戦ひは、真理に対する固定的な一定な、即ち客観的な立場があるとなす見解、しかも尚彼の立場をもその如くに見做す見解に対して真理が主体性であること、主体性が真理であることを主張するにあつた。

(註)(1) S. Kierkegaard : Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift zu den Philosophischen Brocken. S. 265.

(2) Das Sein in der Wahrheit. Hermann Diem : Die Existenzdialektik von Sören Kierkegaard. (1950). S. 34.

(3) S. Kierkegaard : Ibid. S. 254.

(4) Hermann Diem : Ibid. S. 35.

(5) S. Kierkegaard : Ibid. S. 256.

(6) Ibid : S. 256.

(7) Bernhard Meerpohl : Die Verzweiflung als metaphysisches Phänomen in der philosophie Sören Kierkegaards. (1934) S.1-3. メールポールはキェケゴールの弁証法をソクラテスの弁証法から類推的に解釈して居るがその説明は不充分である。その類推法は客体的である。しかしキェルケゴールとソクラテスの弁証法の相異する原因は単なる方法論上の問題でなく実存の、即ち両者の主体的実存の中に存するのである。この点ディームの解釈はすぐれてゐる。

(8) Zweigleisige Dialektik. Hermann Diem : Ibid. S. 38.

(9) Ibid : S. 38.

(10) この点に関してディームもメールポールも同様に認めて居り、この解釈は正しいと言へよう。

(11) experimentierende Dialktik. Ibid. S. 38.

(12) キェルケゴールの根本思想はこの命題に於てまとめられると言つても過言ではない。客体的思惟は「成果」を求め、又一つの「思想」を「成果」として見做す。これに反して主体的思惟は「成果」をもとめず、如何なる「思想」をも「成果」として考へず、過程として考へる。この意味に於てキェルケゴールの思想それ自体をも成果として考へてはならないのである。これこそキェルケゴールの最も主張するところである。

(13) S. Kierkegaard : Der Gesichtspunkt für meine Wirksamkeit als Schriftsteller. S. 116. (übersetzt Von Schrempf.)

(14) S. Kierkegaard : Philosophische Brocken. (Übersetzt Von Schrempf.) S. 6.

七

(2) 主体性とイロニー。キエルケゴールの立場は前述の如きものであつたのであるが、彼はその立場に立つて思惟を遂行するに用ひた方法がイロニーである。否、イロニーは一つの話法とか方法といふようなものでなく、それは彼がよつてもつて立つてゐるところの論理であり、立場そのものであるといへよう。しかしこの立場はそれ自体の本質性格からして既述の固定的客体的立場としての「立場」からは根源的に区別されなければならない。イロニーは主体性の論理であり、従つてそれが自己直観、自己規定の論理であるといふことをキエルケーゴルはフイヒテを通して把握したのである。[1] そして斯かる主体性の論理であるが故に彼の根本的立場、根本的態度として解することが出来るのである。

キエルケゴールがこのイロニーを問題として扱つて居る著作は言ふまでもなく彼の学位論文である "Der Begriff der Ironie" である。該書は一八四一年の作であり、彼の第二番目の作であり殆んど処女作の部類である。彼はその思想を A. P. Adler の著作から全く影響されたのである。[2] (両者の思想的関係は紙面の都合上その説明を除く) キエルケゴールのイロニーの研究が斯様に初期のものであるといふことはこのイロニーの思想が彼の思惟の出発点であり

根底をなしてゐるといふことが先づ考へられるわけである。然しながらキエルケゴール学者の中に斯かる見解をもつ学者が殆んど居ないのは真に奇異に感ずる。本小論文の立場は何よりも先づ以てキエルケゴールの立場の根拠がイロニーにあることを認め主張するのである。先きに第一項に於て思惟方法を二つにわけ、第二の思惟方法として思惟の根本原理の自覚として規定し、それがキエルケゴールの立場であるとなしたが、[3] それは実にこのイロニーの立場の意味に於てなのである。キエルケゴールに於ては方法論的自覚とイロニーとは表裏一律的関係をなして居り、彼は自らの思惟方法がイロニーであり、且つ自らの立場もイロニーであることを自覚してゐるのである。[4]

然らばキエルケゴールの意味するイロニーとは具体的に言つて何であるのか。これを方法論的角度から考へてみよう。

先づ第一にイロニーはキエルケゴールの弁証法的立場のことである。[5] 即ち匿名によるところの著作は読者をして自己自身の実存へと自由にすることを課題としてゐる。然しながらこの様な事態はある一人の実存から他者の実存への直接的移譲に於ては決して生じ得ないのである。自己の実存のその現実は他人にとつては常に彼の実存への可能性とのみなり得るのである。それ故すべての実存伝達は可能性の形式に於てなされなければならない。可能性の形式に於ける伝達は、伝へられるものの中に於て実存することを、苟も人と人との間に於て可能である限り、出来るだけ受取人に近づけるのである。或る一人の人が他人の現実を直接に受取ることが出来る様な人と人との間のあらゆる直接的関係は、その他人の現実が彼が自ら実現しなければならぬところの可能性へと真先きに移り渡らされてしまふことなしに妨害されなければならないのである。この事態こそイロニーの形式に於ける伝達によつて生ずるのである。そしてキエルケゴールはこの様な意味に於けるイロニーを通して次の如きイロニーの一般的規定を与へてゐる。「現象は本

質でなく却つて本質の反対である。[6]」と。

イロニー的表現に於てはすべてのものが姿を匿すことが出来る。それは話者をも聴者をもその言述と結びつけることは出来ない。それは他のものをして自らを示すことが出来るのである。それは又他のものをして虚偽たる物事を打砕きその実体をさぐらしむる誘惑的な力をもつて居る。然しながらそれはこれ等の方法を、個体を消極的に自由にするために、用ふることが出来るに過ぎない。それ故イロニー的方法は、その破壊的な活動を固定的立場へのみか或は斯かるものとしての全現実存在へと向けることが出来るのである。その時問題となるのはイロニーの個々的表示ではなく、優越たる意味に於けるイロニー Die Ironie sensu eminentiori ——何か或る立場に使はれてゐるのでなくそれ自身が立場であるイロニー——なのである。[7] この優越なる意味に於けるイロニーは決して「あれ」、「これ」の個々的現存在者へと自らの眼を向けずそれは或る時代に或る関係のもとにあたへられたる全体的の現実性に対して眼をむけるのである。それ故それは先験性を含んで居り、現実を一片づつ否定して行くことによつてその全体観に到達するのではなく、かへつてそれ自身の力によつて現実を一つづつ破壊して行くのである。それは「あの」もしくは「此の」現象ではなく、現実存在の全体をイロニーの相の下に sub speie ironiae ながめるのである。[8]

却説、斯かる消極的に自由になる活動の背後には勿論積極性が存してゐる。[9]「イロニーは法律の如く一つの要求であり、それは現実性を軽しめ観念性を要求する。」然し問題はこの積極性が露はになるところに於てゞある。キエルケゴールがヘーゲルの影響のもとにソクラテス的イロニーを Pause in der Weltgeschichte として考へた「イロニーの概念」に於ては、彼はヘーゲルを引合ひに出し、ソクラテスをして彼の活動を世界のイロニーに奉仕せしめてゐる。[10] 然しながらキエルケゴールは、世界史の中に具現して行くところのイデーの弁証法と全く絶縁した後に、イロニー

は対話者の存在に於ける観念性を解放せねばならぬのである。キエルケゴールは言ふ「イロニーは制限し、有限化し、限定する、そして斯くすることによつて真理と現実性と内容とを与へる。イロニーは懲戒し罰する。斯くすることによつて品性と堅実性とを与へる。イロニーは、それを知らないもののみに恐れられ、然し知れるものには愛せられる厳格な先生である。」[11]

既述の如くイロニーは、現実存在の全体をイロニーの相の下に sub specie ironiae 眺めるものである故に、それは人間の現実存在それ自体にも関はつて来る。こゝからしてキエルケゴールはイロニーを自己の全体的、根本的態度として規定し、イロニーは実存規定であるとなしてゐる。「イロニーとは実存の形式であつて単なる話し方の形式ではない。それ故著述家が、自分は時々イロニー的に自己を表現してゐるなどといふことを自己称讃すること程滑稽なことはない。本質的にイロニーを有つものはこれを常に有つてゐるのであり、如何なる形式にも束縛されてゐるのではない。何となればイロニーは彼の中に於ける無限的なものだからである。」[12]即ちイロニーは実存への激しき情熱が存する所にのみその存在の権利を得るのである。

イロニーが実存の形式であるとするならば実存（的思惟）が獲得するところの真理及び真理命題がイロニツシユなるものであることが理解される。そして又イロニーが無限的なもの、無限的運動であるとするならば、そこに獲得された真理命題の中にイロニツシユなものをイロニー的方法に於て見出さなければならない。否、そこにこそ真理が把握される。何となれば真理は主体性だからである。

そこでキエルケゴールの根本命題である「主体性が真理である」といふ命題の真理を把握するために、この命題の中にあるイロニツシユなものをイロニー的方法に於て取出して見よう。

この命題はキエルケゴールが主体的思惟に於て獲得した主体的真理であることは言ふまでもないことであるが、然しキエルケゴールはこの真理命題そのものゝ性質を充分理解しその真髄を獲得してゐるが故に、この命題に対する誤解を予想しつゝ、この本質的意味が如何に理解されねばならぬかを、述べてゐるのである。即ちキエルケゴールに言はせるならば彼が主体的思惟によつて獲得した主体的真理であるこの命題の中にも客体的思惟の成果といふものが内含されてゐるのでその関係を明確に把握してはじめてこの命題の意味が理解されるとなしてゐる。彼は言ふ「もし主体性が真理であるとするならば、真理の規定は同時に客体性に対しての対立関係を表現しなければならない。そしてこの時この表現は同時に内面性の緊張を示す。此処に於てこの要求に相応するやうな真理の定義は次の如くである。――客体的不確実性が最も激情的な内面性を以て実現される獲得に於て固持される場合、これが真理である。そしてこれは実存者にとつて存在する最高の真理である。」[13]と。こゝにイロニーが存する。即ちこゝに言ふ「主体性」は主体の中に秘む客体的には不確実なことを、ソクラテス的に言へば「無知」を、換言するならば認識論的に言へば自己の「無知」を、存在論的に言へば自己の「無」を、内面性の無限の激情をもつて把握して行く運動をその内実とするとき、この運動が真理となるのである。キエルケゴールによるならば、この客体的不確実性、無知、無、を個体の「不真理」と称してゐる。故に主体性がこの不真理の把握行動を内実とするとき、それは真理であることになる。こゝに於て主体的思惟と真理との関係が逆説的であることが理解される。キエルケゴールのイロニーはこの逆説を見ぬく力であり、それ自体が逆説的なものである。故にキエルケゴールのイロニーは自らの獲得した命題それ自体の中にも不断にイロニツシユなものを、即ち逆説的なものを見出して行くのである。キエルケゴールは言ふ「主体性、内面性が真理であるとすれば真理が客体的に規定されると逆説となる。真理が客体的には逆説であると云ふことは正に主体性が真理で

あると云ふことを示すのである。然しながら永遠の本質的真理（即ち本質的に実存に関はることによつて、それ自身本質的に実存者に関はるところの真理）はそれ自身決して逆説ではなく、それが実存者に関係する限りに於てのみ逆説である。[14]」と。即ちキエルケゴールの思惟が常に逆説的であり、その不断の逆説的意識を生命とするイロニツシユなものであることの由故は、彼が斯様に自己が単なる認識者ではなく、実存者であるといふこと、そして自己が実存者であることに注意を向けたからである。従つて「逆説は実存者の精神と永遠の真理との間の関係を表示する存在論的規定であり[15]」斯かる逆説的関係に於て実存する実存者の思惟は、その逆説を範疇とするイロニーたらざるを得ない。キエルケゴールがこのイロニーに就て最も具体的な説明をなしたその言葉を最後に引用して置かう。「イロニーは消極的なものと同じく道である。真理でなく、道である。結論を結論として手許にもつて居るからと云つて誰でもそれを自分のものにして所有してゐるとは云はれない。彼は道をもたないからである。そこへイロニーが加はると道が出来る。然しこの道は結論を手許にもつてゐると自惚れる男がそれを真に自分のものにするために辿る道ではない。却つて結論が彼を見棄てる道である。[16]」

（註）（1） Gerhard Niedermeyer : Sören Kierkegaard und die Romantik. (1909). S. 25—26.

（2） Emanuel Hirsch : Kierkegaard=Studien. III. Der Denker, Erste Studie : Der werdende Denker. (1931) S. 124. キェルケゴールが最も影響を受けたアドラーの論文は A. P. Adler : Den isolerede Subjectvitet i dens Vigtigste Shikkelser. である。

（3） 本小論文第一項参照

（4） 彼の著「イロニーの概念」その他「哲学的断片後書」はイロニーの自覚の上に立つて居る。

（5） Hermann Diem : Die Existenzdialektik von Sören Kierkegaard. (1950). S. 38.

（6） S. Kierkegaard : Der Begriff der Ironie.「イロニーの概念」（三木・桝田氏訳）十七頁参照

(7) Hermann Diem : Ibid. S. 40.

(8)「イロニーの概念」二五頁参照

(9) H. Diem : Ibid. S. 40.

(10)「イロニーの概念」三六頁

(11) 右書、一〇八頁

(12) S. Kierkegaard : Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift zu den philosophischen Brocken. S. 177.

(13) Ibid. S. 259—S.260.

(14) Ibid. S. 261.

(15) Hermann Diem : Ibid. S. 47.

(16)「イロニーの概念」一一〇頁。